獣医のカルテ ⑥

発症前の診断が重要

犬と猫の心臓病

こもれび動物病院長
（富山市中川原）
井本 博貴

心臓は全身に血液を巡らせるポンプの役割を担っており、私たち人間と同様に犬や猫、そのほかの哺乳類にも同様の器官として存在します。構造は複雑で、かつ動物種によって心臓病の病態も異なるため、診断や治療に苦慮・難航するケースも多くみられます。

一般的に心臓病と総称されますが、犬において最もよく遭遇するのは「僧帽弁閉鎖不全症（以下MR）」です。

いくつもの心臓病の病態がある中で、MRは心臓の左側、左心房と左心室の間に存在する逆流防止弁（僧帽弁）の形状が変化することにより、左心房中で血液の逆流が生じるものです。聴診をした際の収縮期雑音で発見につながることが多いのですが、発咳（はっがい）、運動不耐性、肺水腫など症状が進行した状態で来院される例もあります。

犬の心臓の超音波検査の画像。血液が逆流している

一方で、猫の心臓病は肥大型心筋症、拘束型心筋症、拡張型心筋症、不整脈原性右室心筋症などがあり、その病態は犬とは大きく異なります。

猫の場合、犬のように聴診だけで判断はできません。雑音がなくても心臓病が隠れている可能性もあり、心臓病に見えてもそれ以外が原因の可能性もあります。このため猫の心臓病を判断する場合には、心臓以外の病気を除外した上で診断する必要があります。

診断で有用なのは、超音波検査とエックス線検査です。状況に応じて血液検査、血圧測定なども実施しますが、超音波検査で心臓内部の構造や動きをリアルタイムに画像化し、異常部位の発見、血流の動きや速度の測定、心収縮率測定を行うことができます。エックス線検査では、呼吸器疾患などの病態との鑑別や、心臓の客観的なサイズの測定をすることで、心臓の状態をより詳細に知ることができます。

治療は内服薬による心臓負荷の軽減を目的としたものが主流ですが、重症化した場合は専門病院での手術も選択肢になり得ます。

犬、猫ともに言えることは、まずご家庭の動物たちが心臓病を持っていないかを知ることが大事です。特に猫においては心臓病を探しに行かなければ見つけられないことも多いため、日頃からの健康診断によるチェックが重要です。

◇

次回は2月7日に掲載します。

2025（令和7）年12月6日
北日本新聞